

開催地名	京都府京田辺市
開催日時	令和6年1月17日（水） 13：30 ～ 15：00
開催場所	京田辺市コミュニティホール
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	地域住民、防災士、市職員 79名
開催経緯	本市では、地域住民の防災・減災の意識向上を図るため、自主防災組織の設置促進、育成助成や地元での出前講座等を実施しているが、近年地域の防災を担う自治会や地域防災組織の役員・参加者に女性が少なく、災害時における女性視点（男性以外の視点）での避難所運営やその他防災活動等についての見識が不足していることが課題となっている。
内容	（1）福住町の自主防災組織発足、歴史について 当時、二つの川に挟まれた福住町という地域に居住しており、水害に見舞われることが多い土地であった。過去の被災の経験から2003年に福住町独自の自主防災組織を発足し、それが今日のいわゆる『福住町方式』となっている。 被災した際に何よりも大事なのは、『住民の安否確認、そのための名簿』である。現在でも防災訓練の度に更新し続けており、防災マップを作成や、さらには近隣市町村を中心に災害時相互協力協定を結んでいる。大災害が発生した場合には、過去の経験から災害の被害が大きければ大きいほど、外部からの救援は遅れてしまう。その教訓を経て、いざという時には、自分達の事は自分達で守ろうという思いで協定を結んだ。 （2）東日本大震災時の追憶 2011年3月11日の震災では、発生した津波で命を落とされた方が殆どであり、また災害関連死が多い。発災当日、近隣の住民が無事に避難できたのは、定期的な防災訓練実施の他、安否確認のための名簿のおかげである。特に『避難行動要支援者』の安否確認に関しては、以前から担当を決めており、本部をすぐに立ち上げることができ、30分ほどで確認が取れた。地域の小中学生も無事避難ができていたのも普段からの訓練の賜物である。 しかし、インフラ・ライフラインの停止により普段通りの事が全くできない、すなわちそれが大規模災害である。数十年前の宮城県沖地震の経験から備蓄品等の準備はできていたが、帰宅困難者を含む2000人近くの方が500人収容の指定避難所・高砂小学校に集中し、足の踏み場もない状態での避難であった。また当日はメディア等の情報が閉ざされ、被災の全体像が分からず状況の把握にも時間を要した。避難所ではトイレの問題

点も浮き彫りとなった。設置に関してはいち早く避難所に仮設トイレを設置できたが、和式のトイレであったために、足の不自由な高齢者にとっては負荷が掛かる問題があった。ただ学校が避難所になっているところは、プールがあるためプールの水を使いトイレは辛うじて使用できたという状況であった。

（３）被災して感じ学んだこと

災害が大規模化すると公の場の人も被災するため、公的な支援の供給が追いつかず公助には限界がある。自分の命や身近な人々を守るための自助、隣近所や地域社会の人々を助ける共助が重要であると痛感した。普段から訓練していても実際の災害では、予想しない状況や困難に直面しうる。また災害時には女性は、社会的な役割や身体的な特性の違いから災害において異なるニーズや課題を抱えている。そのため災害対策においては、女性の声や要望を反映させながら、性別に関係なく全ての人々が安全に避難や救助を行える環境づくりが必要である。女性の視点に立ち、女性の参加や意見を取り入れる事により、包括的かつ効果的な防災・減災対策が実現すると感じた。

また過去の災害の記録は、石碑などの形で残されているが、これらの記録には時代や保存状態の影響により、内容の途切れや欠落が生じることがあり、正確な情報を得ることや災害の状況を理解することは困難である。そのため口頭での情報伝達は、過去の経験や様々な人の証言を通じて直接的な情報を伝えることができるので、やはり口伝することは重要であると感じている。そして災害時において専門的な知識がなければ行動できない。福祉、防災・減災などを学ぶべく、2014年仙台市地域防災リーダー（SBL）養成に参画し、その後2016年より有志で「せんだい女性防災リーダーネットワーク」を立ち上げるきっかけともなり、地域に根差した活動、また大震災の教訓、人命の大切さをボランティアとして全国に発信し続けている。

（４）未災地の方、そして参加者に向けて伝えたいこと

ボランティア活動、防災訓練や夏祭り等の楽しく面白いイベントを通じて、震災を経験していない子供から年配の方まで地域住民とのコミュニケーションの構築、普段からお互いの顔、存在を知ることでも大事であり、顔の見える関係が減災に繋がる。

そして災害に備え、適切な準備をすることは非常に重要である。できるだけ行政に頼ることなく『地域の力』を最大限に活用することが求められる。実際、日本では他国に比べ自然災害が非常に多く発生しており、その割合は世界全体の約1割にも及ぶ。災害はいつでもどこでも起こり得るもの。それゆえ、持続的な防災・減災の取り組みを継続することは非常に大切である。これまでも日本は多くの災害を経験してきたが、その

	中で学んだことを活かして将来の災害に備える必要がある。行政支援も重要ではあるが、地域の結束力、協力も欠かせない。地域が連携し情報共有し必要な準備をすることで、より強固な防災体制を構築することができる。私たちはいつか災害に直面するという事を肝に銘じ、地域力と持続的な備えがあれば、いつか役に立つ日がくると考える。  
開催地より	東日本大震災の経験談、自助・共助の重要性、福住町の取り組み等の具体的な内容についてお話を伺うことができた。 防災・減災対応という場で、男性・女性が互いに足りない目線を補っていくためにも、地域住民への防災意識の向上と併せ、女性の参画促進に努めていきたい。